

2月13日 もう教育部門10「ツボ」

「ツボ」というと、一般的には「花などを生ける容器」、「要点」、「急所」などの意味に使われますが、東洋医学では、「経絡」という気などが流れる場所にある、定まった「つぼ（経穴）」に鍼や灸を行うことにより治療を行います。

視覚に障害がある人があん摩を行い、検校や座頭などの階級制度としても確立したのは江戸時代で、現在でもあん摩や鍼灸を仕事として行っている視覚障害者は多くいます。

令和5年度（第32回）あん摩マッサージ指圧師国家試験の受験者は約1100名、はり師・きゅう師国家試験の受験者は約4100名でした。その中で視覚に障害がある合格者はあん摩で約130名、はりきゅうで約90名です。

このことから、現代では「視覚障害だからあん摩や鍼の仕事をするのではなく、多くのはり・きゅう師のなかに少数の視覚障害がある人がいる」という状況が見えてきます。

体が本来持っている『直す力』を助け、その人の苦痛に思っているところを治すために、理療科の生徒は、人体の約200の骨・400以上の筋肉、そして300以上の「ツボ（経穴）」を初めとするたくさんのことを学習しています。しかし、たくさんのツボの名称を覚え、場所を覚えても、正しいところに鍼をできなければ効果は半減します。

例えば女性の不調によく用いられる「三陰交」というツボがあります。

足の太陰脾経（たいいんひけい）という経絡上にあり、「内果（内くるぶし）の上方3寸」と決められています。

しかし、身長150cmの人も190cmの人も「三陰交」は内果の上3寸です。そして、中国四千年の歴史では、全ての人の膝から下の長さを1尺3寸とも定めています。つまり、足の長い人は長い3寸、短い人は短い3寸となります。

しかし、視野障害があると膝から下を一度に全て視野に収めることができません。残された視覚を活用し、足りない部分を手や空間の感覚などで補いながら、正しいツボに治療を行うことはとても難しいことです。当校理療科の生徒たちは、それぞれの見え方に応じたやり方で学習を進めています。